

空襲一時間余り。その間に原稿が五枚ぐらい進みました。

空襲さわぎのおかげで一色夫妻の帰るのがおそくなり、今日は石炭コンロが起せない（使つてかまはない方の石炭は、選り出すのに大変で手はよごれるし、中々ひまもかかる。使はないでほしいと云ふ方の石炭は、うんとあつて、之は手もよごれない。一色氏がゐない時は、その後者を専ら使ふのだが、ゐる時はそれが使へないので、寒い時は殊におくくうになる）ので、いねちゃん所へあづける本を持つて行つて、白田君の分の夕食をたべることにしました。白田君は数日前から九州へ行つて、小田中さんから彼女の留守中、彼女の分の夕食をとつておくから、炊事が面（めん）休（きゅう）な日には食べに来てくださいと電話があり、僕もそのつもりだったのです。丁度今日は野菜の配給にみかん四つだったので、それをポケットにして、六時頃に出かけました。いねちゃんも小田中さんの所で食べようとしてゐたので、丁度よろしいと三人でたべました。森井さんは胃が弱くて食事にひまどれるので、あとでやつて来ました。やつぱりおかずつきのごはんはいいなと思ひました。お汁と大根のお煮（に）附（つ）とおしんこだが、味は中々うまい。これでも今外で食べれば、一円近くとられるでせう。ごはんの量を考へれば、一円以上かもしれない。いねちゃんと小田中さんは、おさつ（さつ）のきんとんを作つてくれました。

森井さんの云ふことも、だん／＼わかるやうになりました。彼女は出たあとで、何とかして社会の役に立つて行きたいとそればかりを思つてゐた、自分が何の役にも立たないと考へたくはなかつた、さう云ふ時、昔の知り合ひで、消費組合に働いてゐる人と奇遇し、この人を援けることで自分も意義ある生活が出来るのだと思つたのださうです。さうして結婚した。所が病氣になり、また自分が彼の仕事へ協力しようとするのと彼の方でひらりとかはす。何度やつても「それが男の意地とでも云ふのでせうか。あたしがどんなに一生けん命について行かうとしても、そこまで行くと、いや実はそつちぢやなかつたんだ、こつちだつたんだと云ふのです」。結局彼女は、生活と云ふものをせまくしか考へられなかつた。さう云ふ考へかたを彼女は論理でやつて行く生きかたと思つてゐたのです。いねちゃん達が退くつするから、さうくわしくは話さなかつたが、具体的なことを話して行けば、彼女の考へのすぢ道も少しづつわかつて行きます。個別的生活と歴史的普遍的（こくたいてき）生活との統一についての機械論的理解は、まじめであらうとする多くの人々の生き方を困（こ）迷（めい）させ

たが、森井さんもさう云ふものと関聯してゐます。二度目のきんとんを食べかけたら、サイレンがなつて電気は消され、暫く闇の中で食べました。ずい分丁寧に食べたが、全部たべきつたとは思へないので、スプンで茶碗をしきりにかきまはす。いねちゃんはおなべをシャモチ（しゃもち）でかいて

はなめる。中々あるらしい。途中で気がついて、窓のカーテンをとると、外はすてきなお月夜で、忽ち部屋は明るくなる。「かうしてたべればよかつたのに」。程なく僕はみこしをあげる。小田中さんがおさつとじやかと玉子一個とおみやげにくれたので、大いに感謝して帰る。途中で警報がときました。

今夜は割合ひあたたかです。帰つて郵便受けをさぐるとあなたの廿四日付手紙があつた。出る時は丁度あいてゐた裏口から出たのでうっかりしてゐたのです。

身体はもういいのですか。

今年の回想について、あなたが「自信を失つたこと」について書いてゐるが、自信を失ふと云ふことは外向型の人間には非堂(註)によくあるやうです。精神がエクステンシヴに働いて行く中に、うっかり対象を失ふなり、そのテンポまたは調子が現実の困難さや障害のため狂つたりすると、忽ちエクステンシヴがインテンシヴに転化する。この転化の感覚が「自信の喪失」となるのでないかしら。そしてその転化の後再びエクステンシヴな調子とテンポとをとり返すと、それが「自信」となつてあらはれる。僕もその傾向が強い。だから羽仁さんにも云はれたのだと思ふ。だが之は論理的精神を獲得すれば克服出来る。僕は克服したつもりでゐます。尤も時々昔のくせが出るけれど。

エクステンシヴな人間の自信とは、実は本当の自信でなく、テンポの感覚にすぎない。さう云ふ人にはテンポなり調子なりが可成り重要な役割をもつので、テンポ喪失が自信喪失感になるのもムリはない。本当の自信とは、自分の内容的な論理的な充実の感覚、凡ゆる時凡ゆる方法で、現実とのたたかひに充実してゐる感覚であるべきですね。テンポとか調子とかは、自分のものではあつても実は自己支配的なものでなく、何か論理的な資質的なものだから。

それから我々の生活力の自信と云ふものは元來根拠薄弱です。我々の生活力は我々本有のものとして云ふよりも、社会が我々を甘やかしてくれてゐる、さう云ふ事情から来てゐると云へます。我々が知識をもつてゐると云ふことは、我々が外の人より若干物を知つてゐると云ふことにすぎず、それは外の人より恵まれた境遇(註)(学校へ行き、ひまがあり、本が買へ)のせいで、我々の自身の力によつたものでない。同様に我々の月給や社会的地位も我々自身の力によつたものでない。別の社会なら我々だつて、これくらいの月給を当然とする働きは出来るが、今の社会では、我々の外の人達が不当に少くしか得てゐないために、我々のいはばのらくらしたやりかたで、これだけ月給とるのは多すぎる。要するに我々の生活力は、我々の本有のもの、我々自身がたたかひ、かち得たものでなく、与へられたもの恵まれたものでしかない。だから自信の根拠にはならないのです。

僕は世界観には自信をもつ。之は不断にたたかつてともかくかち得て来たものなのだから。あなたも物の見方、世界観に自信をもつていい。此の頃のいろんなものの批評はたしかに立派であり、どこへ出しても恥かしくない。だから僕はこちらで竹中君や臼田君や森井さん、いねちゃんなどと話す時、「幸つちやんが今日の手紙でかう云つてゐる」と云つて引き合ひに出したり、「フィガロの結婚」の手紙なんかは見せてあげたりする。物の見方と云ふものは、与へられて出来るものでなく、自分の力で出来るものです。きつかけは与へられるにしても。

自信の喪失は我々外向型人間に必要な調節器かもしれない。エクステンシヴな人間の精神の動きは空想的になる、うつかりすると現実を遊離する。さう云ふ遊離や行きすぎへの調節器かもしれない、すつかりまけてしまひさへしなければ。自信の喪失によつて自己の本質を一步一步確かめ、一步一步論理的な方向へ、自己制御的な、自己支配的な方向へ成長し、やがてはエクステンシヴな精神のもつ「調子」そのものを利用して、普通ならむつかしい事までやりとげることも出来るやうになる。たたかひには「調子」が必要ですからね。「調子」はたたかひに於てはエネルギーの飛躍的達成を可能にする。だけど「調子」に支配されてはならない、「調子」を支配せねばならない。馬に勝手に引きまはされてはならない、馬を手綱と鞭とで禦さねばならない。そしたら徒歩で歩くより、はるかに早くはるかに遠くまで行ける。徒歩でとびこせない小川もとびこせる。徒歩なら届かない木の実にも届く。

健康についても、自分の健康の正体を正確に把握することが自信を得る第一の要提^⑤。健康の正体を知れば、それに応じた生活が出来、無理をしなくてすみ、自信を喪はなくてすむ。自信と云ふものは多くの場合、本来の現実的な実体的なものであるよりも、幻想的な誇大化された観念的なものだから。自分の才能や生活力や健康を実体的に把握し、それを論理的に発展させるべきこと。いつでも自分の真の力を認識すること、誇大も卑下もなしに。尤も真の力を静止的に認識するのではなく動態的に、発展するものとして、認識すること。従つて飛躍可能性も認識し、「調子」も認識すること。本有の力と他から与へられた力とを区別しつつ双方を計量すること。さうすれば外から与へられた力も本有の力に加乘され、本有の力を強める。

今日は克蘭クビエウを読んで、つく／＼アナトオル・フランスのよさを感じました。何度読んでも何とも知れず味は⑥の深い傑作ですね。渾然たる珠玉的作品に思へます。こんな風なものを書いてみたいと思ふ。ドレフュス事件と云ふモニュメンタルな事件をとらへて、⑦さう云ふ市井的な手近かさの中に、そのモニュメンタルな事件の本質、社会制度の本質の諸契機をちやんと形象化する。いきり立ちもしないで、ちやんと現実へのつきさすやうな憤怒を盛つてゐる。行

商人クランクビーユの生活なり生活感情なりへのフランスの洞察はバルザック的です。バルザックの「無神論者のミサ」
 的です。

桃ちやんとの勉強、中々よろしい。あなたのいい点は、いつでもいい協力的弟子をみつけ出すことです。外向的人間は、さう云ふ要素を本来もつが、あなたは特にその点にすぐれてゐる。どこへ行つてもきつとさう云ふよき協力的弟子を欠かないにちがひない、きつと誰かをそれに仕立て上げられるにちがひない。その点僕は外向的ならざる要素、気取りや見栄やカンシヤクもちや、さう云ふ要素のためいい弟子、話相手に常にありつけると云ふわけに行かない。大てい途中から逃がして了ふ。僕の方がエゴイストだからかもしれない。人間が小さいからかも知れない。

では、もう一時になりましたから、今夜はこれだけにしませう。風邪をひかぬやうに。僕はすつかりよくなつた。今夜の月と星とのよさ。桃ちやんによろしく。

謙一から幸子あて（一九四四年二月二八日の記）

十二月二十八日（本）晴

今日鎌倉へ行つたけれど、やつぱり空襲ケイ報になつた。僕の鎌倉行きは必ずポーが鳴る。午前中に行くつもりで、省線が三十分も来なかつたために行きついたらお昼でした。みつちやんには大カブラをおみやげにしました。彼女は日あたりのいい部屋でモンペイを作つてゐました。島村君からは何の音沙汰もないさうで、もう丁度二週間になるから、やつぱり入隊が確定したのでせう。

みつちやんここでは、久しぶりにゴボウとお餅のは入つたおそうじ（おそうじ）とを御馳走になりました。お餅は鎌倉では一人一キ口で、みつちやんとは二人分だから割りがいいのでせう。東京は一人五百グラムで、半分のわけです。晩御飯がほしくないくらい（お）いたつぷり食べて了りました。みつちやんは三十一日ぐらいからいねちやんの所へとまりに行くはず。

さて僕が今日鎌倉へ行つたのは、この夏みつけてあつたアメリカの文学史九冊（七十五円）を買ふためだったので、残念乍らうれて了つてゐました。本屋を四、五軒見歩いて駅前まで来た時、サイレンがなりました。そこでとにかく切符を買ふために並び、買ったのでみつちやんとこへとつて返して、汽車へ乗れなかつたら、警報のとけるまで、みつちやんとこですすことにして、ゲートルまいて再び駅へ来ると、もう空襲警報は出てゐましたが、とにかく電車へのれま

した。三時五十分発で品川へついたのは五時前、空襲警報が出ると必ず交通機関は混雑します。渋谷で空襲ケイ報が解
け、下北沢で警戒ケイホウもとけました。

帰って見たら、柿が届いてゐました。思つたより早くついて甚だうれしかつた。何よりのプレゼントを感謝します。あ
けるのもどかしく一二つたべて、さとお説にしたがつて、重箱とアイロン箱とにワラをうまくつめ、その間へは入
るだけ入れました。之は粉がふくまで食べないやうにとひもでしぼりました。梅はびんへつめかへました。いねちゃん
所へ三分の一ばかり持つて行くことにしました。と云ふのはワラへつめた三分の一は粉がふいてからわけようと思つて。
それに小包を解いたりしてゐるとおそくなつて、石炭の火はちよつと起すのがおくくうになつて、今日も臼田君のごは
んにありつかうと思つたので、柿をもつて行くのに丁度いいわけになりました。

今夜はいねちゃんの部屋で例によつて小田中さんと三人で、中々おいしいお汁のおかずで食べました。だが火の気がな
いとも寒いので、家へ帰つてカイロでも起さうと思つてゐたら森井さんが来て、ナンキンマメを電気コンロでいり
はじめたので、折角上りかけた腰もまた下つて了りました。所がいざたべようとすると、今夜もサイレンです。折角の
ナンキンマメも手さぐりで、味だつて眼で見てたべるよりは落ちたでせう。

今夜のケイ報も長く、一機づつしつこくやつて来るらしくて、月明りはあるとはいへ、甚だつまらぬ時間になりました。
またぞろ森井さんとわけのわからんおしやべりになつて、ケイ報解けてから帰りました。月と星とがすてきにきれ
いで、歩くのも中々乙でした。

此の手紙はお正月に届くかも知れません。

では新年おめでたう。今年もきつといろくど多難な年でせうが、お互ひに自信をもち、二人で立派に生きぬいて行き
ませう。赤ん坊には絶大な期待をもつてゐます。その赤ん坊に次の世のすべてを期待したいのです。恐らくその赤ん坊
は最も困難な情勢に於て育てられねばならないでせう。それだけに、我々も一生ケン命です。貯金もせねばならないし
勉強もせねばならない。あなたも充分注意して下さい。身体の力は誰もが弱つて来てゐるのですから、ただ意識的な注
意によつてだけ、せめて健康の保持にとめませう。僕も今年は、即ち一九四五年には、南北戦争を書くでせう。

では、お父さん、お母さん、ふうちゃん、桃ちゃん、早苗ちゃん、看護婦さんにも、どうかおめでとうのあいさつを御
伝へ下さい。一九四四年への訣別と共に。

幸子から謙一あて（一九四四年二月二九日付け、同日の消印）※

お手紙26日附まで届いて居ります。ダイヤモンドの稿料も同時に。20円は定期貯金に、五円は桃ちゃんのお正月のお小使^⑤ひにします。

毎日小雪で、ひるまでも本を読むためには、炬燵板の上にスタンドを置かなくては駄目な位、暗い日ばかりでした。今日ようく雪はありますが、陽がさし始めました。どれ位続くかわかりませんが、唯明るいと言ふ丈で気持も違つてまいります。

此の頃、風邪は引きませんが、身体にむくみが来て、手がことにひどく、ペンを握るのが変てこな感じで続きませんでした。今日はすこしひきましたので、手紙を書く事にしました。

ブランドイションも始めのヨ定は十一月いっぱいでありましたが、段々病キや突然の用事のためにおくれて来て、ここ四、五日は手のはれのためノオトも意の如くならず、本も頭痛がして来てよめず、炬燵でころりとよこになつてうとくばかりしてゐました。今日で大体終ります。

第四章は一からずつと面白くよんで居ります。いろいろ日本の現実に思ひ当るところがあつて、何時何処の国でも同じ位置にある人の考へること、やる事は同じところをねらふものであることがわかります。

一では、戦争政治へどうでもゆく路、それに対する国民の力、それに妥協するもの（一時的、びほう的ではあれど、改革への路にちがひないもの）、それに対して尚も押し切る力、政府の弾圧法、それに答へる大規模のストライキそこから公正雇庸委員会なるものが生れざるを得ぬこと、結局、一に於ては力と力の対立抗争、それが解決への路をすこしづつ開く事、公正雇庸委員会が万能の力を持つてゐぬとしても、とに角、それを得た事は国民の力である事をよく感じとれます。

四ノ二は、此の前の戦争政治ですこしは知つたところです。南部議員の改革政治反対の口実に使ふ「州権侵害^⑥」と、その歴史のところは特に面白く思ひました。大きな政治権力を持つて勝ちまゝをしてゐても、一応は左もらしい口実がなくは行動出来ぬと云ふ事の中には、いろいろ面白い意味があるのですね。矢張り、国民の批判や大衆へのはばかりを感じるのか、それなしにはどんな詰らぬ口実でも人々を動かす事の出来ぬと云ふ事を知つてゐる、と云ふ事それ自身

の中に、人は理論なしの行動を拒否するもの、と云ふ真理を認めるのでせうか。大衆は一応の口実（理論―原理）さへあれば、それでもう其の内容如何までを考へずとも行動出来るもの、と云ふ感じも与へられます。尤も、その口実で、その行動を行ったものは南部派議員であつて、南部の全国民ではないのですが。

国内の矛盾の爆発を対外転化させんとする努力、これは昔から歴史にある事ですね。ネールは其の本の中で「人は歴史の教訓を理解する事はまれだ」と云つてゐます。「歴史の塵芥箱へ唯投げこんでしまふ」と書いてゐます。本当に歴史を過去のものとして、現代と切りはなして考へる事によつて、歴史からのちを捨て去らせ、歴史から教訓を得る事ではないのです。現実の歴史の書かれなかつた事も一ツでせうが、人は「歴史」に対して、随分長く誤つて考へ、其の中から現代を形成してゐる生命を忘れてゐたと思ひます。このところ、まだはつきりしないので、うまく云ひ度い事の表現が出来ませんが、詰るところ、四章の一及二で、私はその暗示（？）をうけます。さうして歴史の眞実の姿、引き続き流れる根本のものⅡ人類の力、力と力の抗争、と云ふものが歴史を作るもの、と云ふ信念を得ます。歴史に対する正しい考へ方を得ることと、国民の批判力Ⅱ歴史の推進力である事を知り、国民を形作る一人一人の人間の健全な批判力の重要性を感じます。さう云ふ点で四章は啓蒙性を含んでゐると云へるでせうし、「眞実の歴史」と「うその歴史」についてもある観念を得るでせうし（即ち歴史に対する正しいキョー味、歴史は過去のものではないことを知るでせう）。

三、四、五は、あまり人の知らない事で、さう云ふ点の面白があるでせうね。三の中の「非米運動調査委員会」と云ふのは、其の性質、其の主義、其の行動共に日本的と云ふ現代流行語と、その運動を想起させますね。南部派のモットーたる反改革主義、排他的アメリカ主義、侵略主義は、これ又身近に大きく見える姿であり、他国の歴史は他山の石ならずの感が深い。プランテーション制度Ⅱ中世的封建的野ばんの遺制Ⅱは、実に歴史に抗し人類の発展の妨害をする、凡ゆる悪を生み出す。

ここまで書いてらWさん原文が来しました。リトルページと鈴木東民を返して来しました。リトルページの方は教へられるところ多大、東民の方は眞実の姿だと云つてゐました。大変おもしろかつたところこんでゐます。彼にはまだカントロヴィッツを借してある。これはとてもくおもしろい、もうすこし貸しておいてくれとのこと。それからプランテーション出たかと云ふので、もうぢきだと云つたら、出たら一部ほしいと云つてゐました。プランテーション制度、すこし話しましたところ、「ヤア、それは日本の姿と変わらない」と云つてゐました。彼に林ごをすこしたのんでおきましたから、買

へたら送りませう。

厚生省の能率調査の統計で、一番凡ゆる作業に能率的である順位を示すと、1. 捕虜、2. 囚人労働、3. 学徒、4. 熟練工、5. 一般工、6. 徴用工の順位だそうです。おもしろい姿ですね。多^ぶいに問題を含んでゐる。但し、極秘の統計とか。

又、手が腫れて来ました。今日はアナトオル・フランスの事も書き度かつたのですが、あなたの云ふ如く彼と他の人の別れみち、大きなヒューマニズムの最初の芽について、其こからの彼の凡ゆる作品の底にある根本的な考へ(その作品)について書きたいと思つてゐましたが。

現代史、家には(-)丈あつて、柳の□□(2)、紫水晶のゆびわ(3)、巴里に於けるベルジュレ(4)がありませんね。天使の反逆も是非よみたいのに。

辰野隆のA・Fの批評、実に気どり乍ら大まちがひをしてゐます。

今日はノオトも駄目になりさう。

克蘭クビーユの「テーマ」、長倉事件と共通です。では又

※この封筒の裏面には「昭和十九年十二月廿九日」の日付けが記されているが、そこに挿入されていたのは一九四四(昭和一九)年二月三十一日記の手紙文、および一九四五年一月二日記の手紙文であった。逆に一九四五年一月二日付け・消印の封筒中には、一九四四年二月二十九日に認められたと思われる手紙文が挿入されていた。二月二十九日の手紙と一月二日のそれとは、封筒と中身が相互に入れかわつてしまつたのであろう。ここでは双方の中身を差し替え、本来の組み合わせに戻して翻刻・掲載した。

幸子から謙一あて(一九四四年二月三〇日の記・消印)

十二月廿日

今日ようくプランティションのノート一応すみしました。あとはまとめやら整理が残つてゐます。九月以来足かけ四ヶ月の日数を要し、今までにない程の注意の集中努力を必要としたもので、ヤレ〜と思はぬでもありませんが、同時にいささかがつかりした様な力抜けも覚えます。丁度試験が終つた時の気持に似通ひます。今のところ、まだごちゃ〜

ですから、残つてゐる整理、まとめがすめば、一応消化出来るでせう。

もう明日一日で本年は終ります。本年はここ暫くの中で一番身心共に変動の多かつた、激動時代であつた様に思はれます。さうして今日考へてみると、一応その苦しみを通過したあとの無関心と無感動とが残つた、かの如き感じもあります。とに角、自分が変わつたと云ふ感じがある。本をよんでも前とは感じ方が大分変つてゐる事を感じるので。進歩か後退か、まだわかりません。あまり積極的なものではないらしい。前にも書いた無感動が色こく出て来た気がします。山は晴れて陽が当つてゐるのに小雪が舞つて来る。冬枯の田舎景色。それでも年末らしいあはたらしい下駄の音もします。

元日の日は組合の新年会を家でひらくとかで、今日からにんじん、ごぼう、里芋の皮むきを始め、煮物を重箱にこしらへて詰める相ですから、今日の午後はそんな事で終るでせう。

看護婦さんたちは家に帰りました。朝ちやんも道場が休みになつて三、四日は休暇で、廿一には帰つて来るらしい。あまり騒々しくない正月であつてほいものです。

あなたのところは、いねちやんたち集まるとか、集まつても何も食べる楽しみがありませんね。ノートラでも。何だか嫌にでくぞくする日です。

では里いもさんがまつてゐますから、これでさようなら。

幸子から謙一あて（一九四四年二月三一日の記）*

十二月廿一日夜

二十八日お手紙、午前中落手。風邪、すぐなをせてよかつたです。患者の中で多いのは、一寸した風邪から他の余病を併発し、重悪化する人が実に多い。ぢん臓だとかろくまくとか、その他思ひ出せぬ位沢山の症状あり、元は皆營養不足と過労からの風邪が原因になつてゐます。一番多いのは風邪から胃腸障害へゆき、目は血走り顔は黄いろく熱が高く、短い時間で激しく弱い弱する。下痢のため、ますく營養はとれず、ね汗とそれで一日に一貫匁もやせた人がゐます。で、心配してゐました。

私の方は風邪は引きませんが（年中炬燵にゐて、雪だるま程も着こんでゐます。衣服の上から身体をつまもうとして

掴めない位、ころ／＼に着てゐるので、動作が緩慢になつてしまつた。踞むと立ち上るに骨折れるし、便所へ行つたり、お風呂にいつたりする時、手間どれる(まど)。むくむのです。むくみのため心臓が何時も苦しい。階段を登り切ると、暫くはトン／＼して沈まるまでまたねばなりません。ノオトや手紙も時間が長かかると、手が腫れてペンを掴みにくくなる。其の程度ですから、たいして心配いりません。前よりは種々のやりたいと思つた事が出来ないから、凡て今までよりへらす外ありません。さうすれば、たいした事はありません。心配無用です。

今日は修練場から朝ちやんが帰りました。彼女も例の流行風邪で一週間も絶食した相で、目をへこませて帰りました。顔もどす黒く汚くなり弱つてゐます。

修練場の所長は松井と云ふ医者ですが、飯田の医師会の医者は殆んど顧問とか何とか、修練所に關係してゐます。其の医者や医師會關係の人々は、風越館の建民修練所を自分達の私設料理屋位に心得(こころ)で、いり交り立ち代り友人を連れてやつて来て、客を連れて来たからと云つて、大ッ平に修練生のための材料を使つて、修練所の炊事婦をして働かせ、お酒持參で飲めや歌への乱ち騒ぎを演ずるのだ相です。前もつて電話で何人の客、何人前の料理、風呂を沸せと注文してよこす相です。修練所の事務員はさう云ふ時は部屋を貸す丈で、お風呂沸しも料理も運般(うんぱん)も後片附もしませんし、時には自分等も御相伴するから、其の行るが公私混合や、修練所關係を口実に自分等の私的な目的に公の材料を横領する事など、考へたり問題にした事はない相で、炊事係や給仕達が労力を提供するのだから、お金を一円位握らせればいい位に思つてゐる相です。

つい二、三日前も飯田の医師會の忘年会をするからとのことで、朝ちやん怒つてゐたが、病中、松井さんに二度も診て貰つてゐるし、個人的に願ひ奉(まも)まれて、私の労力丈なら提供しませうとのことで、相当の料理を作つたのだ相です(勿論、朝ちやんは修練生の材料を使ふ事は断つた。すると各自、建民修練所の名前でいろいろ集めて、前もつて持つて来たのですつて)。するうち酒によつぱらつたのが「オイ／＼料理はこれ丈か、酒がぬるいぞ。早く運べ／＼」とか云ひ出すのもあつて、朝ちやんが「ここは料理屋ではないし、女中は一人もゐません。料理は好意で作つてさしあげました。後は自分達でおやり下さい」と云ふと、「何を」とか云つて、やにはに拾田札を握らせ様とするので、「おやめなさい」と云ふと、「俺に恥をかかせたいのか。さア、とれ。ぐず／＼云はず働いた、働いた」「恥をかくのはお前さんのぞんだところ」と云つて、さつさと炊事場の火を落して、「後片附はていねいにする事です」と云つてきめつけたら、事務所のぢいさん達は「まあ／＼、私がするで、するで」とか云つてごまかしてしまつた、とか話してくれました。修(しゅ)

練所の仕事なら、いくらでも労力の出しおし⁽⁶⁾みはしないが、修練所を個人の設備の如く、わがもの顔に利用する奴のために、炊事婦たちを夜の十一時すぎまで働かされてはたまらない。まして新しい修練生が来てゐる時、二階でどんちやん騒ぎなんぞやって、眠りは阻げるし、所長も其の仲まで他の者より幾分遠慮してゐる程度なんだから」と盛にふん慨して話しました。かう云ふ種類の事が、どれ程沢山行はれてゐる事でせう。

プランテーションは一応終わりました。今日はもう看護婦さんは家へ帰したし、人手不足で暮の大掃除、正月用の煮物作り等々、とても忙しい一日でありました。疲れて二階へよろ／＼上る位足が重い。残った時間は一昨日戻つて来たリトルページをよみました。読み返してみると実に面白い。前、気のつかなくかつた事実⁽⁷⁾に気がついたり、Wさんではないが全く教へられるところ甚大です。(以下、『リトルページ』についての読書ノート風の記述が便箋三枚分ほどあるが省略した―編者注) どうやら此の調子では全部に亘つた感想を書いてしまひさうですね。実はその事で書き度い事はいっぱいありますが、あなたは既によんでゐるのだし、私の下らない感想を長々書いたところで退くつさせる丈でせうから、仔細に亘つては私のノオトへ書きこむ事にしませう。

※幸子発一九四四年二月二十九日付けの書簡に注記したように、この一二月三日記の手紙文は、翌一九四五年一月二日記のそれと同一の封筒に挿入されていた。二つの手紙文は、まとめて一月二日に投函されたのかも知れない。しかし封入のさいにつく用箋の折り目に微妙な差があり、後日、中身だけが一緒にされた可能性も否定できないので、ここではそれぞれ別個に投函された書簡として扱った。

謙一から幸子あて(一九四五年一月一日の記)

一月一日(月)曇晴

新年おめでたう。元気にいいお正月を御送りになつたことと思ひます。今年は仕事のことでも、あなたとの生活でも、子供のことも、力一ぱいの誠実な生き方で終始したいと思ひます。歴史的現実がどんな風な展開をし、二人の生活がその歴史的現実の展開の中でのいかなる状態におかれ、いかなる転変にもたらされるにしても。

昨年は、前半は「プランテーション」と疎開とですぎ、後半は余り創造的な生活を進め得なかつたが、あなたとの結合に質的な成長をしたことで、満足出来ます。あなたが「プランテーション」を読んでくれたことのおかげです。だから

一口に云へば、一九四四年の前半は僕が「プランテーション」を書き、後半はあなたが「プランテーション」読み、かくして「プランテーション」を媒介乃至契機として、先づ僕の歴史学が飛躍し、次いであなたの世界観も質的成長をなし、それらによつて、戦局に余儀なくされた疎開と云ふ我々の生活史最大の「不幸」にも拘らず、二人の結合の成長もたらされたのだと思ひます。そして我々の結合の成長のためには、疎開をめぐる我々の行きちがひ、次で白田君をめぐる行きちがひも、また意味をもつたものと見たい。赤ん坊は二人の最大の希望です。そのためにあなたが身体の不調に悩み苦しむにしても。

一九四四年を我々の新たな出発のメルクマールとして、一九四五年を更に進んで生きてませう。

お手紙有難う。二十九日付を今日うけとりました。暫くお手紙来ないので心配してゐたら、むくんだせいだつたのと、むくみはやはり妊娠のせいですか。本当にいろ／＼と苦勞をさせてすまなく思ひます。之からもまだ／＼いろ／＼と肉体的精神的苦勞がふえ行くことですが、どうか勇氣と理性とを以て元氣に耐えて行き克服して行つて下さい。僕もあなたの苦勞を思つて、その分がんばります。信頼して待つてゐて下さい。手がむくんんだり、その他の身体の故障で手紙が書きにくかつたらハガキでも結構です。こちらはハガキもなかく／＼買へませんが。

「プランテーション」第四章の感想を有難う。僕の読みとつてはしかなかつたことを読みとつてくれたのを心から感謝します。第四章のすべては素描的で説明不足ですが、第二章第三章に展開したことの結語でもあるから、わかつてもらへると思ひます。予定では第四章ももつと多く書き（政治史を展開する）、第五章に「南部の社会」として、ハーンドンやスコツポロやその他小説などを織りませ、第二、第三、第四章で出て来たモチーフを綜合しつつ、シンフォニーのフィナーレのやうに壮大絢爛(?)と展開して結語としたのでありますが、(緒論と対応的に)その力も時間もスペースもなかつた。若しそれらをやれば、今の一倍半の大きさになつたでせう。さう云ふものを第四章へ凝縮したのでから、第四章のキュークツさ、説明不足もまたやむを得ません。それに政治と云ふのはむつかしいのです。まだ／＼僕には政治をよく書く力はない。第二章第七節や、第三章第二節のむつかしさがそれです。そして政治が書けると云ふことは歴史が書けると云ふことなのでせう。

全体として通読して感じることは何ですか。やつぱり歴史と云ふことではないでせうか。若しさうなら、僕として成功だとしていいと思ふのだが。鶴田君もいつかさう云ひました。僕が、農業や金融や工業などが出て来ると僕はやつぱり素人ではないから、このテーマは本当は経済学者が書けばよかつたんだらうねと云つたら、「それや駄目だ、経済学

者が書いたらちつとも面白くないものになつて了ふよ。やつぱりあなたが書くテーマだ。それでよかつたんですよ」と。とすれば、僕がもつと農業や工業や金融を勉強して書けばよかつたと云ふことになる。

だが、歴史家である羽仁さんや北山君が何と云ふか、それが僕が一番ききたい所ですね。此の頃本室へ行つてもどこへ行つても、しきりに「もう出たか」ときかれ、ハガキや手紙の問ひあはせ、電話の註文もあるのですが、肝腎のものは本当にいつ出ることやら。それにしてもあなたに読んでもらつてから、ずい分自信をもてるやうになり、早く出てみんなに読んでもらひたいと云ふ気持ちがぐつと強くなつた。それ迄は鈴木君式の読みかたしかしてもらへないかも知れないとあきらめる気持もあつた。

幸子から謙一あて（一九四五年一月二日の記・消印）※

一月二日

廿一日の夜、利郎さんから速達で、盲腸手術のため、一月末皆と一緒に来たいとの事。相談しましたが、今は炬燵が二つしかないのです、大勢一緒に来ても泊るところがないとのことで、利ちやん丈、早々に来る方がいいと云ふ事になりました。

病室も二階はタンカが上らないから客間を使ふ外ない。正月中で来客も多く、それは困るから、近所に病室を借りる様、手はずをしませう。つきそひも入用になるが、まづないでせうから、利ちやんさへ早く来れば（と云ふのは廿三日頃から月末まで桃子の試験がうけられる様なら、ついて上京せねばならぬ）、世話は私が見ます。今燃料が全くないので、手術用の消毒に最少限必要の炭二貫匁と、消毒用洗石けんの用意を患者さんにして貰はないと、手術が出来ません。併、利ちやんに炭二貫匁と云つても運ぶ事も出来ないから、こちらで何とか方々頼んで手に入れる外ありません。だから石けん丈は用意して来る様に云つて下さい。お米も不足で、始終都合してゐますが、これも又無理でせうね。手術の日から二週間で旅行は出来ませんが、お母さんは一ヶ月位ブラ／＼すればよからうとは云つてゐますが、一ヶ月だとお母の方、一寸家では無理ですから、移動証明が入用となります。病室は糸を抜くまで借りて、其の後は二階の部屋にゐればいいと思ひます。以上の様な事、お正月に来たら云つておいて下さい。

家が思の外せまい上に、私や朝ちやんが来て荷物も詰めこむ、で大分お母さん面白くないので、一寸でも人が来て泊

と云ふ事になると、家中ごたくと云つて嫌ひます。私も居候の身ですから、自分勝手には出来ませんの。で、あまりサーヴィスに期待せぬつもりである様に、それとなく利ちやんに知らせして下さい。問題は家のせまいこと、人間の多いことにあるので、他には何もないのですから、利ちやんには病室を借りて、せいぜい私につきそひ代りをする^{と云ふ}風に云つて下さい。

二十八日附の手紙、今日(二日)落手。

昨日から風邪を引いたらしく、身体の骨が痛いので、此の手紙はこれで出します。

幸子

※この手紙文は一九四四年二月二日付け封筒に挿入されていたものだが、さきに注記したように、本来は一九四五年一月二日付け封筒にて投函されたものと考えられる。

謙一から幸子あて(一九四五年一月二〜三日の記)

一月二日(火)晴、風強し。

空つ風で砂塵がひどく、ひきこもつてゐたかつたが、今日は本室で「御用始め」とやらがあると云ふので、物凄い省電のこみかたで十分余り遅刻(十一時)しながら、とにかく行きました。式はもうはじまつて、聖学院の理事長でもある当会の沢田理事長は、女学生向きの訓話をやつてゐました。クエーカー教徒(フレンド派)でもあるせい^か、しきりに感謝しる感謝しると云つてゐました。感謝は甘受に通じる、どんなひどい現実であつても、人間は甘受と云ふ手があるのです。理事長は中風の気があるので、時々口のあたりを運動する必要があるのせう。だから訓話が好きで、その訓話も、此の頃の空襲時代には聴きに来まる者が少く、そのために分室へはしきりに、式には出てくれと云つてくるのです。僕も実は先月三十日に「主事を命ず」と云ふ辞令をもらつたので(月給はすえおき)、余りさばるわけにも行かなかつたのです。

帰らうとすると、小田中さんが「明日よろしかつたらゐらつしやつて下さいつて森井さんがおつしやつてましたわ」と云ふので、では行きませうと答へて、さて竹中君と二人で銀座へ出ました。どこかで食事したかつたのにする所がない。竹中君が握り飯をもつてゐるので、それを一人で食はうと食べる所をさがして、やつと銀座コンパル館と云ふ昔のニュー

ス映画ゲキ場、今の演芸館へは入りました。柳橋、仲治、小文治、山陽、しん生、あとは女二人のシャミセンと唄。古今亭しん生（サイトウ信也に似た口調でよつばらいがとくい）と云ふのは始めてなので、どんな男かと思つてゐると、すつかり爺さんで、どこかきかん気の、やせて皮肉で威勢のいい、大きな口のあたりに特徴があつてタンカなんか切るのによささうな、頭はすつかりはげて、色の黒い所へ酒をのんだせいか銅色にテラテラ光り、それへ白髪のスダレを横から五、六本かけてつやをけしてゐる、頬骨が出て、眼つきは酒のせいもあつてちよつとすごみがある、そんな爺さんで、少し顔や身体をななめにして「あはび」をしやべりました。みんな中々面白く、幸ちゃんがあると面白いのと思ひました。

空つ風はもうやんでゐましたが、寒む々々とした街で、さつさと帰りました。人出はまだ相当なものです。

帰つて火を起し食事をすませると、ラジオの演芸をきき乍ら早寝しました。又夜半に起されるとたまらないので。夜半に空襲で起されるので、この頃は、こたつを作るやうです。炭の配給は、僕なんか八俵来る所を二俵しか（八月以来）来ないと云ふ悪さですが（之ではガス無しで炊事がやつて行けない）。

先月二十九日以来あなたへ長い手紙が書けなかつたのは、森井さんとの見解対立から小田中さんの問題もは入つて来て、彼女達へ長い手紙を書かねばならなかつたからなのです。廿八日夜、丁度干柿をもつていねちゃんの所へ行き、ピーナツをもつて来た森井さんと、それに小田中さんを加へて四人でたべたり駄弁つたりしてゐた時、小田中さんが「菊池さん、あたくし、死んでも生きてもどうでもいいんです。どうせ死ぬんですもの、どうでもいいんです」と云ひ出しました。小田中早苗君は、前にも紹介しましたが、此の九月に津田を出て、白田君の世話で調査会には入つた人で、身体つきはみつちやんの肥つてゐた頃くらいで、寒がりです。セーターやら何やらありつたけ着るので、ちよつと女サンタクローズのやうな女の子です。すべてスローモーションで、言葉もゆつくりゆつくり云つて、白田君とはまるで対照的です。それが白田君の学生時代のファン（？）で、白田君と共同生活をしてゐます。

「小田中さんで変ですわ、オブローモフ主義なのよ。何でもどうでもいい、勉強なんかしたくないし、本なんか読むたくない、何をしたいとも思はないて云ふんですもの」と白田君も前に二、三度云つたことがある。「小田中さんが駒形さんがわからない、人的にあるのがいやだと云ふんです」とも云つたので、「駒形君はいい人なんだよ、安心してゐたらいいよ。人に理由のない悪意や偏見は絶対にもたない人だ」とこたへておいた。白田君のある時は、余りぼくたちの会話には入らないで、「小田中さん、ねむいんでせう。おやすみなさいよ」と森井さんに云はれては、「ええ」と云つ

て、のそくと別室へ退く。

この間も「彼女がくじ(松本)へ帰らうかどうか迷つてゐるのよ。彼女の兄さんが戦死したので、あととり娘になつたから、早く帰つて来いってお父さんが云ふんですつて。所がお父さんが最近迎も若い人を後添ひにもらつて、小田中さんはそれがいやなの。まだお母さんの一週忌になるかならずなので、彼女、お父さんのやりかたに不満なの。だから帰りたくないつて云ふんですけれど、そしてらお父さんが補助を送つてやらないつて云ふんですつて。どうしたらいいのでせう」と臼田君から云はれた。「森井さんは、帰らしたらいいでせうつて云ふの」「そりやいかんと思ふな。疎開すると云ふ意味なら別だよ。だけれど、お父さんと新しいお母さんとの結合に不満で帰りたくないと云ふなら、帰る必要はない。それより問題は、お父さんからの補助なしでやつて行くと云ふことだ。さうして独立するつて云ふことだ。森井さんは、この頃の若い人は苦しむことがいやなんだから、少し苦しむといつて、さう云ふ意味で帰らすといつて云ふんだらうが、そんな苦しみは必要だ。独りで生活を築いて行くと云ふことで苦しむのは、その人の前進にとつて必要な苦しみだが」と云つたものです。

それが、死んでも生きてもどうでもいい、と云ふ。かう云ふ言葉が、青春期の人間の口から出るとは。この間、特攻隊の座談会の新聞記事に一人の若い隊員が、「自分はこの年まで、面白い思ひをしたことがない。人生に生き甲斐を思つたこともない。だから今はじめて、人生を愉快に感じる」と云ふ風な意味の言葉を云つた。さうだ、この頃の青年達は、本当に自分の生活と云ふものについて、考へる余裕を持たされずに来てゐる。小田中さんもそれかと始めに思つた。さう云ふ人には、生活の普遍的意義を考へさせ、人生の意義、歴史的意義を評価させ、歴史と云ふものに希望をもたせるべきだと思つたので、さう云ふ話をした。生きる欲求をもたせるべきだと思ひ、彼女が生きる欲求をもたないのは、先づ無智だからだと云つた。所が森井さんが途中から、さうぢやない、小田中さんは欲求をもつてゐる、自分は津田時代に、自分が何の価値もない人間だと思へなくて、死んでもいいと思つた、その時は欲求がうんとあるのに、欲求の対象をつかめなかつたのだ、と云つた。それならそれでもいい、結局やはり、外界、自然、歴史を知り、自らの生活の意義を考へることが第一だ、と僕は答へた。所が、今度はいつの間にか、また森井さんの言葉で、小田中さんは自分の生き方をもつてゐる、だから他人がそれについてどう云はうと「どうでもいい」と云ふのだ、と云ふことになつた。僕は之は森井さん自身のことを云つてゐるので、小田中さんの状態ぢやないと思つた。何故なら、自分の生き方をもつてゐる、他人がそれを何と云ふともかまはぬと云ふのは、自足してゐるわけで、他を欲求してゐない。それに、そんなら

「どうでもいいんですの」とわざ／＼僕のの前へ云ひださないうし、「死んでも生きてどうでもいい」などと云ふ言葉にならない。

僕は森井さんのひとりよがりな態度にやや不快になつて、問題をこんぐらかされたまま帰つた。そして長い手紙を書いて、之までの彼女との意見対立の一つ一つをあとづけ、結局彼女の言葉にされると何もかもあまいいなわかないものになつて了ふ、しかも彼女の言葉は古い言葉で、おくれた諸要素の翳を去り切つてゐないものだ、だから僕の言葉にならないと、結局問題は発展させられるのでなくて引き戻されることになる、それに森井さんには一種の固執がある、自己閉鎖的な固執がある、それある限り我々はわかりあへない。大体彼女は僕の愛情の理論に異議ありと云ふ、その異議とは僕が愛情と云ふものを受動的に静的に見てゐると云ふ（人間関係の反映と云ふから）。それに対して僕は、さうではない、反映と云ふ言葉は決して受動のみを意味しない、人間関係が基底となり、その心理的反映が愛情であり、愛情は結合の感情として人間関係を更に深めることとなり、深まつた人間関係は更に深い愛情となつて反映し、その愛情がまた人間関係を深め、と云ふ風に極めて動的に交互作用を通じて発展して行くもので、愛情の神秘主義的理解こそ、静的な受動的な理解だと答へた。この僕の答へについて彼女は何にも答へなかつた。

次に彼女は、僕の行き方を「論理で固めて、それに行爲を追隨させて行く」と云ひ、それはかつて自分もやつて来たが、いつでも無理を感じて来た、今ではむしろ論理を超えた真実ととりくんでゐると云ふ。之は僕の生き方についての異議です。だから先づ僕は、自分が論理で固めて、それから行爲を追隨させるのではない、それ所か行爲なり現実なりから論理を導き出し、その論理の方向へ行爲し、錯誤試行的に論理を是正し、行爲を是正し、この論理と行爲との緊密にして不断に錬磨的な交互作用を通じて生きて行くのだと答へました。彼女がかつてやつてゐた方法こそ、論理で固めて行爲を追隨させたもので、云ひかへると観念的論理を以て行動したのだ、だから無理だったのだ。例へば彼女が結婚したのは、自分の社会的価値をはつきり自信出来ず、しかも何とか社会的価値ある生活をせねばならぬ、自分独りで駄目なら誰かを助ける形で社会に役立ちたい、さう思つてゐた時、昔消費組合の仕事をしてゐた人で、いろんな仕事をやつて人と偶然会つて、それで結婚したと云ふ。この結婚の如きは全く観念的で、また社会的価値ある生活と云ふことについて観念的で、さう云ふ観念的な「仕事」のために自分の現実の任務、即ちおかれた環境の中の不合理と日常生活の中で戦つて行くと云ふ任務、自分の家族のこと、自分の職業のこと、中島君との交友のこと、それらの一切をさぼつてしまつた。これこそトロツキスト的だ。これは云ふまでもなく正しくない。僕はそんな形で論理をきたへ追究して来た

のでない。

また論理をこえた真実なんかは世の中にあり得ない。世界は合法的にある。すべては論理的である。ただ人間がその論理を認識し得てゐないものは無論いくらでもある。それは論理以前なのであつて超論理ではない。超論理と云ふことは神秘主義にすぎない。それは認識努力の放棄であり、現実への不誠実に外ならない。しかも森井さんは人を論理で固めすぎると批難し、自分は論理なんか超越してゐると云ひ乍ら、実はあなた（森井さん）に感じるものは論理の感覚だ、自己閉鎖的な論理の感覚だ、彼女ほど理くつを感じさせる女性は今まで余り見たことがない、結局超論理と云ふ風なものを含んだ論理を彼女はもつてゐるのでないか。彼女の言葉（僕の言葉を受け入れず、何でも自分の言葉になほしてしまふその彼女の言葉）も結局彼女の論理の体系を示すものではないか。

次に彼女は僕が竹中君なんかに精力をつかひすぎると云ふ。いくら云つても駄目なんだからと云ふ。或ひは相手の受容力を考へて、それに適合して云はないと効果がない、「白田さんはあなたの言葉をまるのみにしてゐる、だから行動だつて余り感心出来ないぢやありませんか」と云ふ。即ち竹中君の例でも白田君の例でも、僕の失敗を意味する、それは僕のやりかたがまちがつてゐるからぢやないかと云ふのです。それに対しては僕は、自分は教師として行動してゐるのでない、僕は友人であつて教師ぢやない。友人としての僕は、竹中君が友人としてあらはれる時はいつでも、その問題について自分が正しいとする理論をしつこく云ふより外にありかたがないのだ。僕はものの効果ばかり目的としたくはない。僕は自分のありかたを誠実にすると云ふことを第一とし、その効果はむしろそれから先のことだ。そして一回きりしか話さないなら相手の受容力が決定的に重要だが、一回きりしか話さないのではなく、何度でも友としてある限りしやべるのだから、始めわからなくとも、いろんな問題でくりかへししやべつて行けばわかかつて行くと思ふ。白田君だつて二、三ヶ月一緒に話したと云ふだけで、効果が出なかつたからと云つて僕のやりかたが正しくないとはいへない。それに第一僕は、人に結論を教へるのでない、僕は問題を提起してゐるだけだ。結論は夫々の人にまかしてゐるので、あくまでも問題を提起し、それについて夫々の人を考へさせ、夫々の人の内心の斗争へ目覚めさせる、内心の斗争に点火する、個人の内部の二者（普遍的自我と個別的自我）の斗争を起させるだけだ。さう云ふ風に長い長い手紙を書きました。

所が三十日に本室へ行つた時、小田中さんにその森井さんへの手紙をたくしたら、小田中さんから僕に同封のやうな手紙をよこされました（この同封された手紙は発見できていない―編者注）。彼女は森井さんのやうな自己閉鎖的なものを持つて

はるなかつたのです。だから僕は三十一日に、また彼女へ長い手紙を書かねばならなかつた。そこでは、前夜（二十八日夜）の彼女の言葉について、僕が考へたことを書き、彼女に生きると云ふことを説いた。生きるとは現実とたたかふことだと云ふこと、何もかもたたかひで、自然も人間も外でも内でもいたる所でたたかひが行はれ、そのたたかひを通じて総てが発展し成長して行くこと、人間の歴史は大勢の人々の不合理非人間との斗ひを通じて進むこと、歴史とはたたかひに外ならないこと、そして自然の歴史と人間の歴史との相異は、後者は「意識的」なたたかひであること、だから人間の歴史の方が進歩と云ふことがはつきりあらはれる（進化よりも）こと等々を書きました。こんな風で、あなたに手紙をさぼつて悪いとは思つたが、さしあたり森井さんを論駁し、また目覚めようとする小田中さんに現実を説きあかすことが僕の生活に重大だと判断したので、二人に書いたのです。

それから一月三日に、森井さんの招待に応じて、大根、いも、カボチャ（みつちちゃんのおみやげ）等をサツカリンで実においしく煮て、重箱につめ、それをもつておひる頃に行きました。みつちちゃんはその朝鎌倉へ帰つたさうで、いねちやんと僕と小田中さんと三人が招待を受ける形になつた所へ利ちやんが来たので、一緒に行きました。森井さんは白米と、おみおつけと、しることを御馳走し、僕はお煮つけ、利ちやんは餅、いねちやんはおさつこの油やきを提出しました。昼食がすんで、利ちやんが帰り、あと四人でノートラをやりました。所が小田中さんがお腹がよくなって晩御飯をたべに行つてくれと云ふので、僕も弁当をもつて来てゐたから、サイレンもならないままに落ちつきました。

さうすると、白田君の話から、また森井さんとの云ひ合ひとなり、例の問題になつて了ひました。始め白田君は結婚したがつてゐるのだから、見合ひでも何でも結婚して苦しんでみるといいのだと森井さんが云つたので、僕は絶対にそれはいけない、そんないい加減なことは云つていけない、結婚とはそんな「苦しんでみる」ことぢやない、最も重大な必然的であるべき人間関係だ、従つて、恋愛以外のいかなる契機からも結婚はすべきぢやないと主張する。彼女は僕がさう云ふと、いつの間にかそれに賛成してゐる。そのくせ、「けれどあたしの姉が二人あますが、みんな見合結婚で矛盾なくやつてゐる。あたしは彼女達が恋愛ぢやないと結婚してはいけないと云つて家でいつまでもゐるより、見合結婚でもとにかくあゝして生活を築いて、いい子供をうんでくれる方がいいと思ふ」などと云ふので、また僕は戦端を開しなればならなかつた。結局彼女は、我々は究局の目標は同一だが、方法がちがふのだと云ふ。僕は例へば結婚と云ふ問題には恋愛と云ふ方法以外はない、目標が同一で方法がちがふと云ふことは本当ほうそだ。方法がちがふと云ふことは世界観がちがふことだ、とまで云はねばならなかつた。結局彼女とは話すことの無駄をさとり、彼女も暫くこの

問題は待つて下さい、と云ふことになった（以下次号）。

幸子から謙一あて（一九四五年一月二日の記）

昭和二十年一月二日夜

克蘭クビューの感想、同感です。フランスは法延^⑤、判事、裁判の短篇が実に多いですね。人間悲劇にも出て来ます。ここでフラ・ジョヴァンニと云ふ無知な修道僧をして、町の余論^⑥を指導する善の友会員を批判（？）させる。彼等の善とは？善友会員の構成人員、彼等に「善」を判断する能力ありや？善行の対象は、誰に善であつたか、を楽にスラリと上品に、言葉短く叙述する。それから監禁のジョヴァンニ、囚人中の二人の社会改革者をして（一人は暴力で、一人は理論で）語らせる。ジョヴァンニはどちらも否定して、神の道を説く。（それから裁判、法延の場のおもしろいこと。ここを書くつもりでぬかしてしまつた）。併しねむつてゐる時、狡知博士の名の下にリュシフェルが、又はサタンが無知の彼に理性を与へる——即ち批判精神を。彼は苦しみ、泣き乍ら、遂に彼の神が絶対でないことを知り、「真理」とは何かを知る。

（以下、アナトール・フランスの短篇「清浄の家」「トマ氏」「住込み泥棒」、および回想録『わが友の書』について、その要旨・抜き書き・感想などが読書ノート風に、用箋一〜三枚にわたって記されているが省略—編者注）こんな風に一ツ一ツとりあげてみると、手紙は相当長いものになり、あなたにとつては至極退屈なものになるでせう。私^⑦が他の事を書く^⑧と、又いろいろ小言の種を生むかも知れませんが、此の方が無難だと云ふよさもありますし、私も差しさわりの事について書くわけで、気持ちも楽で愉快ですから、当分こんな事でも書かして貰ひます（以下、A・フランス『わが友の書』からの抜き書きが用箋二枚ばかりあるが省略—編者注）。

寛ちやんが辻岡マダムに逢つたところ、プシはあの附近に出没し、辻岡マダムが世話をしてやつてゐるとの事です。死んだと思つてゐたのに。彼は今年始めて屋外で冬を越すのですね。老年時代に這入つてから、運命は彼に悲惨です。世話をしてやつてゐると云つても、たいてい知れたものです。どんなに放浪生活で彼は汚れ、やせ、みぢめ^⑨になつたでせう。あの単純な甘へる事^⑩しか知らぬ彼の自活生活は、どんなにみぢめなものでせう。この冬肺炎に犯されれば死にますね（そしてそれは可能性がある）。甘つたれのプシがどんなに愛情に飢へ、世間の人間の恐ろしさや残酷さにまいつた

か、考へると本当に辛くなります。私が肥つてゐる頃は肥つてゐたし、私の病気の時は彼も偶然病気をした。桃ちゃん
は私とプシと似てゐると云つた事がありました。何となく、自分もそれを感じる時もあったのですから、私共の家庭
の崩壊は、彼にきつと解つたのであらうと思はれます。私に感じられるより、彼には強くはつきり解つたのでせう。彼
はあなたや利ちやん達が残つてゐる家は、もう昔のそれでない事を悟つたのですわ。
彼が自分で解決出来ぬ不幸に苦しめられるより、死んでくれた方がいいとも願ひ、他方どんな不幸も彼の生命ある限り
は、彼なりに乗り越えるであらうとも望み、寛ちやんの手紙以来、一種の胸苦しさを覚えます。彼は私共の生活の象徴
であつたのではないかなども思ひ、雪のふる冷めたい夜にほうぼうするであらう彼のみぢめな姿に、涙をこぼさず
はゐられません。こんな事を書く、又あなたに怒られるのでせうが。
では、今日はこれでやめませう。

幸子から謙一あて（一九四五年一月四日の記、五日の消印）

本日（四日）お餅少々お送り致しました。稲ちやんにもわけてあげて下さい。此の前の柿と同じ位の割で着けば、九日
頃には届く事と思ひます。

それからついでがあつたら、同盟世界週報、毎号定期的にお送り戴き度いのですが。本屋の都合で送つてくれる様なら、
半年分位払ひこんで、本屋から送る様にして下さるとめんどろ（めんどう）ありませんが、―それは今やつて貰へないでせうね。

スメドレ女一人―森井さんをお持ちなら、暫く拝借願へる様、お頼み下さいませんか。

「判」は又わからなくなつたとかで、まだ手元にまゐりません。何と云ふ店でせう。とうてい印税用にはまにあはぬで
せう。

バンクヘット、棉花統制法のバンクヘットはB・J小作法案のバンクヘットでせうか。彼のこと、すこしお知らせ下さ
い（暇な時で結構）。

民主党第一主義と云ふ語に含まれる概念と、日本的なもの云ふ語に含まれる排他的セクト的人種偏見のもの、―そ
れが矛盾をそらせ本質をまぎらす点、非常に類似を感じます。同じ性質の同じ作用をする麻酔剤の如きものの様に思は
れます。

ノオトが終つて、昨日から緒論のノオトからのよみ返しにかかりました。これは本日中に終るでせう。リトルページの書いてゐる中の人種偏見や、A・フランスの懷疑主義（普通云はれる）に就いて、若干感ずるところありますが、今晚でも又書きませう。

A・フランスは今までに、短篇集五冊、昔語り、わが友の書、S・ボナールの罪、タイース、レーヌベドオク、等まで読みました。ここまでの中では、云はれる如き懷疑主義を感じません。私の考へる懷疑主義は誤つてゐるのでせうか。彼は唯、今までの絶対的な唯一的な観念を否定する丈です。それが懷疑主義ならば、私も又さうであるのかしら。彼にはりつけた懷疑主義のレットテルは誤つてゐるものと私は思ひます。

現代史の楡の木影のプロムナードの外の三冊、ほしいものです。ほんやくはあるのでせう。誰か知つてゐる人で持つてゐないかしら。／＼二、柳の衣桁／＼三、紫水晶の指輪／＼四、巴里に於けるベルジュレ氏

さようなら

幸子から謙一あて（一九四五年一月五日の記、六日の消印）

一月五日

今日はお誕生日と云ふのに朝から曇つたまゝ冷めたい固さうな小雪がさーッと吹く風にまぢつてパラ／＼と落ちて来たり、真黒い雪雲が空を走つて流れたり、本当に淋しい日でありました。

身体の方も昨夜は熱もないのに熱のある時の様な寝苦しさで、安眠出来ず、朝五時の警報で起きてしまつたため、一日ねむい様な目の中に埃のたまつた様な不明朗な日であつて、甚だ芳しくない一日をすごしました。

勉強の方、今日明日と二日で終るプランもあつたのに、とう／＼出来ず、これも又心を満足させずに終りました。あなたからは三日も手紙が届かず、淋しい様な氣もしました。でも慰められるところは、朝も四部屋の掃除を思ふ存分にやつたこと、夕方も下の掃除全部と庭の竹箒掃除もきれいに رفتた事です。午後は岸田国士さんのお話があるし、招かれでもゐたのですが、そんな訳でゆかず、炬燵でうたたねをしました。

アナトオル・フランスは大部足りないのがあつて悲観です。

楽屋裏の話（一八九四年）／花盛りのころ（一九二二）／ピエール・ノヂェール（ ）／ジエローム・コワニヤールの意見（一八九三年）／*天使の反逆（一九一四）／現代史の終三部（これは送つて下さつたのだ相でしたね）

思ひの外面白かつたのはタイイスです。前に読んだ時とは雲泥の差がありました。思ひの外詰らないのはジャン・セルビアン(一)の願ひです。

大体、今まで読んで来たのは、短篇集一〜六まで／ジヨカスト、やせ猫(一八七九)／S・ボナールの罪(一八八一)／ジャン・セルビアンの願ひ(一八八二)／わが友の書(一八八五)／タキース(一八八九)／レーヌ・ペドオク(一八九三)／赤い百合(一八九四)の十三冊で、まづ前期に属するものはジェローム・コワニヤールと楽屋裏を除けば、殆んどよんだと思ひます。

*エピキュールの園(二)(八九四)——これは今夜からです。

短篇にもクランクビーユ其の他、いいのがあります。

ギド・カヴァルカンテイ／リュシフェル／陽気なブッフアルマッコ／人間悲劇、これ等は短篇第三巻にあり、それぞれ皆すばらしくいい。とくにブッフアルマッコは、書き方も内容も何とも云へずいいです。

此の中の流れの基本を貫く考へ方は、其の後の凡ゆる作品で逢ひます。偏見について、無智に就いて、批判と懷疑を代表するリュシフェル、裁判について、どれも皆上品で物静かの中に鋭いメスを感じさせます。人間悲劇はタイイスとよく似てゐます。唯、女が出て来ない丈の相違で、無知のがむしやらの信仰がくずれゆく過程です。併し、タイイスより人間悲劇の方がずっとすぐれてゐるでせう。

短篇四、クランクビーユ／ピユトア／トコ氏／住込泥棒

ピユトアを除いて、あとは皆、裁判関係です。

短篇(5)ジャック・トオルヌプロオシユのコントでは、内乱(フオリナタ・デイ・ウベルテイ)がいい。

短篇(6)書ひげはたいした事ありません。

わが友の書はいいですね。前にも書いたですが、一房の葡萄、新しき愛(齒)、ノジエール祖母さん、*シユザンヌ篇、雄鶏、仙女物語りについて。

*はレーンの心理学の幼児の心理の説明そのまゝ、レーンはこれをよんでゐたのではないかしら。

今日はヘルニア手術三人、夜は暇になり相ですから、病院も全部で百人首(脱ぎ)でもし様かと云つて居ります。静かな夜です。暗幕も張つたし、サイレンが鳴つても、此のまゝつづけられます。今夜はこれと云つて何も集中する仕事は出来相もなし、何か心楽しめる本でも探して読まうかと思つてゐます。

利郎さんは何時出発するでせう。部屋の都合もありますから、決まり次第知らせてくれるといいけれど。みつちゃんも一諸（お）でせうか。お正月は楽しくすごせましたか。

何か書き度いと云ふき持にかられてペンを持ったのですが、実は何も書く事はなかつたのです。

さ（お）ようなら。

謙一から幸子あて（一九四五年一月七日の記）

一月七日（日）快晴

正月三日間、いやなお客が来なかつたと思つたら、名古屋大阪へ来たのですね。尔来フィリップの戦局は急テンポに展開しさうで、昭和二十年の決定的様相が見えて来ました。また召集が来てゐます。僕もいつになるか。

あなたのむくみはどうですか。二日付のお手紙を二通受けとつてゐます。修練場の朝ちゃんの話も、日本の現実ですね。あさちやんのふんがい、自分のことに感じられません。日本にはゴーゴリやバルザックが出て来なきやならない。二葉亭や独歩や秋声をもつと壮大にした作家が出て来なくては全く駄目です。漱石や鴎外では駄目です。僕はフィリップのビュビュ・ド・モンパルナッスを読んだ。パリの淫売婦の話です。フィリップがドストエフスキーに傾倒したり、ジイドの友達だつたり、クローデルに愛されたりしたと云ふから大した期待なしに読んだが、ドストエフスキーやジイドとまるでちがひます。昔ビュビュを読んだ時は、ただの淫売婦小説だと思つたが、今度は見なほした。フィリップは淫売婦ベルトを食ひ物にするビュビュを描きながら、問題を正しく提起してゐる。即ち、ビュビュの悪をビュビュの魂の悪として描かず、社会組織の悪として描く。哀れなベルトの無智な生き方にも、フィリップの同情は実にしみじみとしてゐて、決してセンチメンタルに墮してゐない。

一人人間の罪と云ふものを人間の魂の中にあるものとするドストエフスキーの見解と、あなたが「我が友の書」から引用してゐる「アルフォンスは嫉のわるい子です。それはあの子の罪ではありません。あの子の不幸なのです」と云ふアナトール・フランスの言葉に代表される見解とが対立してゐる。前者の場合、すべての人間が免れ得ない魂の罪と云ふものを解決する道は、神にいのり、神のゆるしを受けることの外ない。人の罪に寛大であるのは自分も罪をもつてゐるからにすぎない。後者の場合、問題は明瞭である。即ち人間の罪を解決する道は、社会の不正を解決することにある。人間の罪はその者の罪であるよりも、その者の不幸、その根源が生ひ立ちや環境や社会制度にある、さう云ふ不幸にす

ぎないのであるから、何よりも大切なことは社会を改善することだ。この場合の罪に対する寛大は、問題が個別の罪人にあるのではなく普遍的な社会にある、それ故個別の罪人は犠牲者にすぎない、だから寛大であるべきなのであって、宗教的なものではない。ビュビュの場合も、このアナトオル・フランスの立場にあるのです。それらはレーンの心理学の立場でもあり、我々の立場でもある。

あなたのリトルページのくわしい感想、アナトオル・フランスの感想、いづれも大変面白く、僕もそれらを再読した気持になれます。あなたのこんな風な感想はどん／＼続けて下さい。僕の読めないものを、あなたの手紙を通して読むことになるのですから。そしてあなたの手紙に書かれたことを、僕はこちらで竹中君や臼田さん、小田中さん、森井さん、いねちゃんなどにしやべる時にしきりに利用してゐます。「今日の妻からの手紙にかう云ふことがある」と云ふ風に。そしてぼくもいろ／＼と考へる機会をもちます。

アナトオル・フランスのえらさは、歴史を知つてゐると云ふ所にある。人間の罪も人間の善もすべて歴史的に理解される時、本当の理解を得る。ドストエフスキーの欠陥は彼が歴史を知らない所に発する。我々は我々の中の悪を、後れたものを、歴史的に理解する。それは本然的のものでなく、歴史的生ひ立ちなり環境なりによつて作られた、我々の負目であり不幸である。だがこの不幸、負ひ目を、悪、後れたものと認識した時、今度はこの悪を解決することは我々の責任になる。我々の罪は我々の責任でなく、むしろ受けとつたものだが、一旦それを認識した時、それを解決しないことは我々の罪になる。我々は歴史によつて不幸な現実を与へられた、それは我々の責任でない、だがこの不幸な現実とたたかふことは我々の責任だ。アナトオル・フランスの原始人の齒のはなしも実にいい。僕はあなたの手紙を退屈なんか決してしてゐない。それどころかすべて大いに喜んで読んでゐる。あなたの批判はすべて正しく、僕は全副的に信頼してゐます。

プシが生きてゐるときいて、うそのやうな気がします。明日でも原宿へ行つてみませう。プシが生きてゐたなら、あそこはまだ約二ヶ月と、九月上旬に原宿へ行つた時まで全然かげも見せなかつたわけが、まるでわからない。本当にプシなのかしら。本当にプシなら何とつかまへて、ここへつれて来たいと思ひます。歩いてでも抱いてつれて来ませう。プシのことを考へると僕も涙が出て来ます。どんな風になつて、どんな風に生きて来たことやら。前の家へは入りこんだりしはしなかつたかしら。それにしても本当にどう生きて来たのでせうね。食べるものなんか本当にあつたのかしら。そして今どこに夜をすごしてゐるのでせう。僕がプシの話をすると、小田中さんと云ふ子も猫好きで、猫の姿を

見た日と見ぬ日で調子がちがふと云ふくらいらしいが、しきりに猫をかひたがつて、猫のはなしばかりします。プシの五月以来の生活が知ることが出来れば、小説を書きたいくらいです。あなたのやうな神秘主義的な考へかたには賛成出来ないけれど。

とにかく明日行つてきいてみませう。今日は出られなかつた。僕は日曜日は禁足みたいなものなのです。防空当直制度が嚴重になつて、本室でも毎夜、課長級まで含めて宿直するやうになり（之までは小使守衛だけだつたのに）、分室からも本室へ宿直に行くのです。僕だけ例外だが、そのかはり家をあけるわけに行かない。小使さんの亭主君がある時ならいいが、この亭主君も本室の守衛で、此の頃は隔日にとまりです。その為、早川君とこへの日曜の夜の通ひもずつと出来なくなりました。警報が出ても二、三十分以内に帰つてこれる所でないとい出られないわけです。之は調査会だけでなく、東京中の会社や工場や学校がすべてさうなりました。空屋はこはされるか強制的に売られます。疎開した金持の家では、月給を出して留守番をやとふのです。一家家なんかは家賃をとり立てて時代錯誤です。一色さんはにぎりやだと此の辺で評判が悪い。

プシに会ふことが出来るとすれば奇偶のうちだが、昨日（六日）実に奇偶があつた。本室へ行つて（本田さんから人を紹介してくれと頼まれてあつたので）その帰り、溜池の綜合印度（鈴木正四の所）へ行く用があつて、行つた所が場所がわからず、歩きくたびれて四時頃電車で下北沢まで来ておりた時、入れちがひに電車へのらうとする一人の男から肩をたたかれた。ひよいと見たが、誰だかすぐにはわからなかつた。戦斗帽やオーヴァではみんな同じやうに見えて中々わからんものです。声をかけられて浅原一朗だとわかつた。

「誰かと思つたよ。どこへ行つてんの」「陸軍の燃料局。理研から磯辺研がそつくり燃料局所属にまわされて了つてね。あんたは」「僕は経堂だ。研究室へすみこみだよ」「奥さんは」「奥さんは信州へ疎開してね。君はどこにゐる、すまひの方は」「八王子、西八王子の畑の中にゐますよ。去年のくれに近処の百姓家の娘と結婚してね」「去年のくれですぐこないだかね。それはおめでたう。家はよくあつたね」「去年の夏におやちが大連から引き上げて来て、八王子に家を買つたんだよ。そのおやちの家の借家にゐるわけだね」「それはいい」「長井とか正田とか荒木、知つてるでせう。よく会つてね、あんたのうはさしてゐたんですよ。芦田がいつか日本橋で会つたと云つてね。芦田は大阪帝大の講師になつて行つた。荒木は兵隊に行き、正田は国へ帰つて、今は長井だけしか会へないけど」「長井？ どんな人かなあ」「ひよろ長い男で、覚えてないかなあ。見たらわかると思ふけど。一度遊びに来てくれませんか、すぐわかるから。風呂もある

し、泊りがけで来て下さい。酒も御馳走もありますよ。あんたはそして自炊してるの」「うん」「栄養とれんでせう」「だつてこの通り、肥つて、身体の調子は上々だよ」「もう身体すつかりいいの。みんなで心配してゐただけど」「有難う。すつかりよくて、兵隊の召集来たら、まちがひなしに行きますよ」「着るものは?」「え?」「シヤツとか何とか。不自由でせう、僕の所で縫はせませうよ」「ああ、それは大丈夫。或る程度自分でもやれるし、信州へも送れるしね」「僕も経堂へ遊びに行きますから、本当に是非泊りがけで来て下さい。長井も呼んでおくから。経堂はどう行くのですか……」。さう云ふ調子で、下北沢のホームのベンチで一時間以上話しこんでしまひました。彼はすつかり元氣さうで、昔の神経質な所もなく、いい青年です。もう一人のおでこの浅原とは感じがまるでちがふのです。あの浅原も悪くはなかつたが、やつぱり一朗君はいい。永島が死んでからは高校時代の唯一つの友人と云へるでせう。彼も僕の本の予約をしてくれました。さう云ふ奇偶があつたのですから、プシにも会へないとは限らない。

プシが僕が呼んでやつてくるやうだつたら、どんなにいいかと思ひます。その為には本当に何ものも惜しくない氣がします。

利ちゃんはこの四日にやつて来て、手術はやつぱりこちらですと云つてゐます。井福さんにごかお医者を紹介してもらはうと云つてゐます。利ちゃんがあなたへあんな手紙を出したのも、みつちゃんにすすめられてからだつたので、事情をよく知らなかつたのです。僕もこの月末にみつちゃんと信州へ行くつもりでゐたけれど、今のやうな空襲と防空様子では、行けるかどうかわかりません。それに汽車の切符も大変でせう。それよりあなたが出て来られれば、桃ちゃんの来る時、ちよつとついて来ませんか。プシがつかまつてゐれば、プシも喜ぶでせう。ただあなたの身体の調子によく相談する必要があるが、この辺は空襲にもほぼ安全だし。

僕は実は今日までかかつて、やつと森井さんを脱皮した形です。彼女をスタイリストと一口に云つて了ふのはやさしいけれど、僕はさう簡単に片づけられなかつたのです。第一に彼女は中島君のリーベであつた、そして中島君の晩年に僕の承服出来ない考へかた、ドストエフスキー的な、宿命的な考へかたが出て来て、彼と長い手紙も交換し、結局彼をして「ジエネレーションがちがふのか」とも云はせたものでしたが、さう云ふ彼の面を理解するのに彼女が媒介になるのではないかと思つたこと、第二に、あなたが僕を女の感情を理解しない、もつと女の友達をもつて女と云ふものを理解してほしいと云つたこと、第三に、彼女自身の言表をはつきりつかまへない限り、一口に片づけてしまふわけに行かなかつたこと、之等の理由でとにかく出来るだけ話しあつてみなければならなかつた。

ところがやつぱり彼女は言表をさける。そして僕の意見には共鳴しない。手紙は謎のやうな言葉ばかり（之はその中送つてあなたに見せませう）。結局彼女は、さも理論あり氣に行動してゐるが、実はさうはつきりした理論をもつてゐないし、その理論も粗雑で、しばしばまちがつており、観念的である。彼女の言葉は、いねちゃんも云つてゐたやうに矛盾撞着してゐる。結婚の問題や白田君の工場入りの問題でも、余りよく考へた様子はない。自己閉鎖的で、観念的で、固形してゐる。彼女は僕の言葉を理解出来ない。大体かう云ふ結論を得ました。若し彼女が僕と意見をかちあはせて行くことを避けるなら、僕はやはり、友としてあり得ないだらう、と今日書きました。こんなに通じない相手にしやべるのは、もう飽きて来ました。

小田中さんは僕の話を書きたいと云ひ、「アングロ・サクソン民族」のアメリカ史と、英米文学語学講座の米国史を読んでくれてゐます。尤もここ数日は松本へ帰つた筈ですが。その中白田君が九州から帰つたら、いねちゃんも加へて「プランテーション」の解説をやらうかなと思つてゐます。

森井さんとの討論のいきさつを一通り書いてみようかとも思つたが、めんどうくさくなりませんでした。僕はまだ彼女にレッテルをはることをさしひかえてゐますが、昨日と今日とかけて書いた長い僕の総決算手紙をどう読むか、それにどう態度をあらためるかによつて、すつかりきまるでせう。彼女が、彼女の言動の矛盾を指摘し、彼女の論理の矛盾を指摘した僕の手紙に、誠実に反応するなら交友は続くが、さうでなかつたら之でおしまひです。その中すつかりあなたに話させよう。

結局森井さんとの交渉で、あなたへの手紙をさぼつたのですが、之からはもうちやんとあなたへの手紙をかかさずにすむでせう。女のスタイリストと云ふものがありやうを知るためにも、この程度のエネルギーをつかふ必要があつたのだと思つて、あなたへさぼつたことを許して下さい。僕はやつぱり女の感情を理解出来ない男なのでせうか。竹中君も昨日だつたか云ひました。「君はこのところまでばかりゐるぢやないか。僕のことでも、白田さんのことでも、森井さんのことでも」と。さうかも知れませんが、今日は之だけ。

それから、あなたのお誕生日の祝ひに「プランテーション」をど期待してゐたがやつぱり駄目でした。けれど、僕はとにかく「プランテーション」を、あなたの昭和二十年の誕生祝ひに捧げます。日は多少ずれてもいいでせう。それから郵便局がいつ行つても満員のため、先月から送るつもりで送れないでお金、之は百元は借金の方だが、あとの百元はあなたへ進呈するつものものです。之も二、三日中には送れるでせう。

幸子から謙一あて（一九四五年一月八日の記・消印）

一月八日 一昨日来の雪止み、晴れ晴れした陽の光です。流石は寒にはいつて温度は九時すぎでも零下三―四位で、炬燵にゐても脊中の寒さのためさむけを感じます。セドフ号の人々が零下37℃―45℃位の中で三ケ年も生活した事など、奇蹟の様に思はれます。何も彼も体力と健康に恵まれてこそ望めますね。ソ聯の婦人労働者が男と同じ賃銀をとるのも、同じ条件、責任の下で、日本其の他の様な女だからと云ふ肉体的なハンディキャップを置かぬし、置かずに優にこなせるからです。それでこそ同権も主張出来るのでせう。

七日夜の南信地方敵機侵入の際は、始めてB29の爆音をき、それが頭上を圧迫する様な音を立て乍ら通過する時は、嫌な気持ちになりました。毎日あの音で責め立てられてはたまらない、とつくづく思ひました。路上にも始めて人々が出て、真□な声で敵機来襲を叫んでゐました。七日の朝五時の時もきこえました。一度は落されるものと思はなくてはなりません、此の寒いのに水をかぶつたりするかと思ふと、本當にうるさくなります。こちらにもいろいろ疎解倉庫がある相ですから、あまり安心出来ません。

朝鮮から電報が来まして、利ちゃんの手術の事頼むと云つて来ましたが、御当人からは其の後、何とも音沙汰なく、どうしたのかと思ひます。お父さんは二、三日風邪引きで、当分病院は臨時休業ですが、利ちゃんの来る頃には起きるでせう。誰か一諸に来ますか。盲腸だと重い荷物は持てぬし、何時急変するかもわかりませんね。病室は多分、上島と云ふ前の雑貨屋の二階を借りられるでせう。つき添はとうてい頼めませんから（人手不足）、私が代りに致すつもりです（利ちゃんの方で心当りでもあれば別ですが。若しかしたらみつちやんが一諸に来て、そのつもりかも知れないと思つてます）。それまでに今の風邪げや下痢が恢復する様に致しませう。

一寸も便りありませんが病気ですか。それとも又何か起きてゐるのですか。病気ならお大切に。 さようなら

謙一から幸子あて（一九四五年一月八日の記）

一月八日（月）晴

ずい分降りませんね。十二月に入つてから雨の日を殆ど思ひ出せません。曇つた日さへ少ない。降らないと水が困るかと思つたら、幸ひ冬になつて水道の水が出なくなつた日はありません。それに階下では凍つて水が出ない日が多くても、二階は暖いのか、まだ凍つた日はありません。お勝手の汲置きの水は時々凍つてゐますが。

晴れるおかげで火を起すのも楽なわけです。寒いと慾張つて余計石炭を入れるので、却つて燃えつくまで大変です。渾身の力が要り、右腕は全くくたくたになりす。そのかはり四十分もすると完全に火になつて、朝六時半に起した火は午後三時頃まであり、夕方四時半の火は十二時すぎまであります。おかげで今年、苦勞はしても暖い冬を送つてゐるわけです。

この辺は都心より大分冷えるらしく、霜はずい分ひどく、毎朝薄雪でもつもつたやうに、どこもこもまつ白です。日かげの土は一日中ぬかるんで、歩きにくい、雨よりはましです。下の小使さんが、この三月から飼つてゐるのだと云つてゐた、やせつぼちの牝鶏たつた一羽を平つたい丸籠に伏せて、毎日、日当りのいい裏へ置いては「早く卵をうんでおくれよ、早くうんでくれないと食べてしまふよ。三月に買つた時は、秋頃からうむだらうと云ふことだつたのに、まだうまないですよ」などと菜つ葉の残りをやつたりして丹靑（丹）してゐたのに、昨日犬にとられて了ひました。「鳴き立てたのであはてて行つてみたらもうどこにもないですよ。くやしいこと。一色さんでも十羽ゐたのが八羽まで犬にとられたのださうですからね、奥さんがよくとられないもんだと感心してゐたんですよ。可哀さうなことをしました。ずい分手数もかけましたが、あたしのひぎをつついて餌をくれと云ふほど馴れてゐましたのに。卵もうまないで」「本当に可哀さうなことをしましたね。あとで裏庭へ行つてみると、なるほど空になつた籠のまはりに白い短い羽が少しばかり散乱してゐました。こちらへ返つて来ながらふとふりむくと、大きな黒犬と赤犬とが、いつの間にか来て籠のまはりをかいでのそく去つて行きました。ベルトをつかまへに来たビュビュとジュールのやうに。

今日はプシに会ひに行きました。行きしなに下北沢のホームで、今井正に会ひました。「よう。今一柳君が来てゐたんですよ」「今仕事してるの」「いや準備してゐるんですがね。あなたの所へ遊びに行かうと思ひながら。それはさうといつか本を有難う」「いや。今度はもう少し本格的のを出しますよ」。さすがの大東京もだんく人（人）が少くなつたとも云ふのか、此の頃思ひがけない人に奇偶（奇）することが多くて、これならプシにも会へるだらうと思つた。今井君、会社へ出勤の途中らしいし、僕は銀座で食事をせねばならないので、大して立ち話もせず別れました。